エシカル・トランスフォーメーションと幸福度向上に関する市民意識・行動についての研究

白鳥 和彦
Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員
武蔵野大学 環境学研究科教授

薄羽 美江
Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員
株式会社エムシープラニング 代表取締役

要約

令和 2 年度から 4 年度の 3 年間、大学生の SDGs 意識・行動変容に関する調査を実施し、ミレニアル世代・Z 世代の学生において SDGs の重要性は認識されているが、その行動は経済的および生活上の制約から、直接エシカルな行動に移せる範囲が狭いことが判明した。そこで本年度は、実際に社会生産性を担い、地域コミュニティ活動を推進する 30 歳代から 70 歳代の一般市民 11 名に対して、SDGs 意識やエシカルに関わる意識・行動と幸福度の関係性について調査を行った。社会における SDGs を重要とする認識が実際のエシカルアクションに結びつき、幸福度との相関が得られるのか、社会生産活動に帰属してからの関心・行動の変容や幸福度に関して何がトリガーとなるのか、また、それは自らの幸福につながるのか、定量調査とともに個別インタビューを通じた定性調査を実施した。特に、幸福度に関わる身の回りの環境設定が、環境・社会・経済に直結する地方創生に繋がるであろうとの観点から、多様な社会課題についてインタビュー調査した。その結果、SDGs の課題認識や幸福の価値については個別最適の回答となったが、共通して、良好な人間関係構築の影響がトリガーとなっていることが確認された。これらのことから、エシカルアクションに向けた学習段階においても、経済的制約領域に狭められないプロジェクト推進の可能性、エシカルの重要性を日常生活で自分ごととするため人間関係構築に向けたプロジェクトラーニングの可能性など、今後の SDGs 意識・行動変容にむけた課題を得ることができた。

１．はじめに

（１）背景

2015 年に持続可能な開発目標（SDGs）とパリ協定が採択され、世界は持続可能な社会に向かって動き始めている。SDGs の採択文書には Transforming our world が掲げられ、現状からの修正レベルの変更（change）ではなく状況を一変させるような変革が求められている。そのような背景のもと、国、自治体や企業など、様々な主体が変わり始めている。自治体によるゼロカーボンシティ宣言や、大手企業の RE100 への加盟、ESG 経営などがその表れであり、この流れは今後加速していくと考えられる。つまりサステナビリティへの取り組みは、地球環境問題や社会課題への解決につながる。個人レベルでのサステナビリティへの取り組みとしては、「エシカル・トランスフォーメーション（意識・行動変容）」が代表的なものと言える。

令和 2 年度から 4 年度までの 3 年間のしあわせ研究では、大学生の SDGs 意識・行動変容について調査を行い、SDGs やエシカルに対する個人の意識・行動変容を促していくことの重要性があらためて確認できた。しかしながら、学生の行動は経済的および生活上での制約から、直接エシカルな行動に移せる範囲が狭いことも判った。いっぽう、これまでの SDGs Survey では、学校教育現場の SDGs 評価については闊達にデータが取得されているが、一般市民に対しては十分な調査データが少ない。また、市民がエシカルな行動を志向するための CPI や、志向されない制約などの評価はまだ十分に研究されていない。さらに、エシカルな行動に変容することは、自らのしあわせなどを感じられるものでなければ定着しないはずである。

そこで本研究では、市民レベルでの SDGs やエシカルな意識や行動としあわせの関係性についての研究の必要性に着目した。

持続可能な社会づくりとともに、SDGs が人々（特に一般市民）のしあわせにどのように寄与するのか。その SDGs のパーパス（目的）に立ち戻り、環境・社会・経済の三軸における SDGs が目指す変革において、社会を構成する人々の市民レベルのエシカルな意識や行動が、地球上の誰も取り残さない人々のしあわせ向上に寄与し、それが実感されないと、サステナビリティの社会変革への取り組みが進まないのは言うまでもない。

幸福（Well-being）に関する指標は幾つか公表されており、その一つに（一社）スマートシティインスティテュートの LWC 指標などがあるが、それらは地域や市民の状態を測る指標が多く、また地域への応用としては政策立案に用いられている。

（２）本研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では、エシカルな意識・行動変容を促すこと（エシカル・トランスフォーメーション）により、一般市民の幸せの向上を図ることを狙いにし、今年度は、エシカルへの意識・行動変容の指標としあわせ（Well-being 指標）が連動するとの仮説にのもとに、エシカル・トランスフォーメーションとしあわせの関係性の検証を行うことを狙いとする。

個人レベルのエシカル・トランスフォーメーション（エシカルな意識・行動変容）が、しあわせの向上に連動するとの仮説を置き、SDGs もしくはエシカルに関係する学習や行動を促す機会を設定し、それらを行う前後の意識・行動、しあわせ度（個人の主観）の関係性を分析し、また KPI となる行動因子の抽出を行う。

対象としては、共同研究者（薄羽）の活動拠点であり、SDGs 未来都市に向け行政の取り組みや市民の意識が向上しつつある静岡県伊東市市民を対象とする。

なお本市は、東京都心部から列車で二時間程度の距離に位置する観光地方都市である。6 万 8 千人ほどの人口ながら、地方創生の取り組み課題が喫緊であることは他の多くの地方都市と同様である。伊東市内地域において特に伊東市民自らの課題認識 として、①若い世代の人口流出、②超少子高齢化、③環境意識の不足、④観光の国際標準視点の不足、⑤地域子ども教育の不足について声があがっている。ここには SDGs 達成に資するグローバル・シチズンシップの醸成によるインバウンドからも魅力的な幸福なまちづくりが要諦となっており、世界の幸福を実現するための視野・視座・視点について市民ベースのボトムアップ型調査の機運も高まっており、本研究の対象として相応しく、また他地域での取り組みの参考に資すると考え選定した。伊東市は SDGs 未来都市への取り組みが市民のボトムアップ型ではじまっており、昨年度はインバウンド（海外からの旅行客）を含む持続可能な観光について、市民を対象にした SDGs 市民研究会

が連続して定期開催され、持続可能なまちづくりについては地域協議会も立ち上がっている。

２．研究の方法

（１）SDGs Survey、幸福度診断の実施

市内の各まちづくり団体に属するリーダーである市民 11 名を対象とし、令和 5 年 10 月中旬から 11 月初旬に、①「SDGs Survey[1]」、②「幸福度診断（Well-being Circle）[2]」を実施し、web にて回答した結果を収集した。「SDGs Survey」については、JEI のシステムより 50 問の回答を抽出[3]、「幸福度診断」については、対象者がそれぞれ当該 Web サイトに入力し診断結果として表示された得点を収集した。

（２）インタビューの実施

上記(1)の回答後に、当該市民全員を対象に、収集した個人の結果をもとに、一人ひとりの SDGs 実践に関わる意識・行動並びに幸福度について、令和 6 年 1 月末から 2 月初旬に、個別に一人あたり約一時間のインタビューを実施した。回答後からインタビューまでの間に、市内 SDGs に関わるセミナー、ワークショップも推進された。その参加印象も含め、回答者 11 名の差異や特徴点となる要因分析に向けたインタビューは、他回答者の内容については知らされない。インタビュー方法は対面（一部 Zoom を利用したハイブリッド）により行った。インタビュー結果の取りまとめにあたり、内容の再確認のため再度意見交換も行なった。

（３）SDGs Survey、幸福度診断、インタビューの解析

SDGs Survey および幸福度診断の結果、インタビュー内容から、SDGs やエシカルに関する意識・行動、しあわせ度（個人の主観）の関係性分析、KPI となる行動因子の抽出の検討を行った。特に、SDGs Survey の 50 問の設問回答のなかから「幸福度」に関わる回答に注目した。

3．調査結果

（1）調査対象

調査対象者の属性などは下記の通りである。なお、今回の調査対象数は少なく、個人を特定できないように属性や集計結果のみ記載し、SDGs Survey および幸福度調査の個別結果の掲載は割愛する。

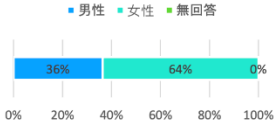
年齢構成は 30 歳台から 70 歳台までと広い年齢層であった。男女比は、男性 4 人（36%）、女性 7 人（64%）であった。

有効サンプル

名前	性別	年齢	職業	回答回数
ITO - 1	男性	35~39歳	自営	はじめて
ITO - 2	女性	35~39歳	自営	3回目
ITO - 3	女性	40~45歳	自営	はじめて
ITO - 4	女性	70~74歳	自営	2回目
ITO - 5	女性	40~45歳	医療機関	はじめて
ITO - 6	男性	65~69歳	自営	はじめて
ITO - 7	女性	50~54歳	自営	はじめて
ITO - 8	男性	75~79歳	その他	はじめて
ITO - 9	男性	70~74歳	その他	はじめて
ITO - 10	女性	46~49歳	その他	はじめて
ITO - 11	女性	55~59歳	教育機関	3回目

性別構成

	n数	構成比
男性	4	36%
女性	7	64%
無回答	0	0%
合計	11	100%



年齢構成比

2023年	n数	構成比
22歳以下	0	0%
23～29歳	0	0%
30～39歳	2	18%
40～49歳	3	27%
50~59歳	2	18%
60~69歳	1	9%
70歳以上	3	27%
合計	11	100%

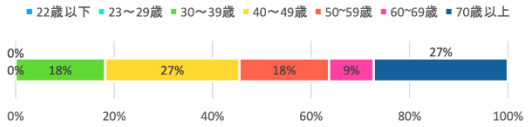


図 3.1 調査対象とした市民の属性

SDGs Survey については、今回の調査前にも回答をしたことがある経験者を含んでいる。また、SDGs に関する認識や実践については、「学習したのでよくわかって行動している」が 5 名、「学習したのでわかっているが行動していない」が 4 名、「聞いたことがあるがよく知らない」が 2 名の回答者構成であった。

（2）SDGs Survey 回答結果

SDGs Survey においては、想像力―情報力―学習力―行動力―達成力の 5 つの SDGs 達成のためのコンピテンシーを設定し評価を行っているが、11 名の回答者の傾向としては、全体として、学習力-なぜ世界の問題が起きているかとの

システムを理解しようとする力において強い傾向を示すメンバー特性があった。SDGs Survey 11 人の平均回答結果を、図 3.2〜3.4 に示す。

5 つのコンピテンシー（レーダーチャート）において、過去 3 年間の学生を対象とした調査に比べ、行動力が高めに出ているのが特徴的である。

回答者における、日頃の SDGs 達成に資する行動傾向においては、特に「目に見えにくい子どもの貧困問題」や「資源ごみの分別回収の実践」「国ごとの人種差別問題」「科学的研究の必要性とその論文が世界に発信される重要性」「畑の栄養成分への関心」「フードロスに関わる野菜の形が整わないと流通価値がないという課題」について、「とてもそう思う」という１０ポイント満点中８ポイントを超える認識の高さが示され、「幸福度について考えることがある」という回答にも 8 ポイントを超える関心を持つメンバー構成比が示された。この点からも個別インタビュー調査に繋ることとなった。

いっぽう、「SDGs 達成が 2030 年までに達成できる」ことへの否定的観測や、「買い物をするときには安いものをたくさん買える方が良い」とする経済観念を支持する傾向、「カーボンフットプリント」「MSC/ASC の認証海産物」「地球一個分の資源消費を超過している地球環境の現状」「生物多様性に関わるレインフォレスト・アライアンス」については、初めて聞く言葉であるという状況や、多くの情報を保ち得ない、グローバルな「恵まれない世界の子どもたちの成長支援への寄付や援助」行動に結びつかないという状況にあるメンバー構成であることも事前に確認された。

伊東市市政においては SDGs 普及啓蒙を推進しており、SDGs 未来都市を目指すプロセスにおいて市民のボトムアップ型の活動を推奨している。本回答者においては、この SDGs への積極的な活動推進リーダーを含み、いっぽうで SDGs については多くの情報を有さないが、日々の活動において持続可能なまちづくりやひとづくり、ことづくりに資する、他者へ伝搬力をもつリーダー素養の強いメンバーに回答を依頼したということもあり、結果、SDGs 17 のゴールへの関与する回答傾向としては「Goal 8 － 働きがいも経済成長も」に高い傾向が見られる結果を得た。すべての人のための継続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用及びディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を推進することに関与する設問への肯定的回答が強いメンバー構成比を成

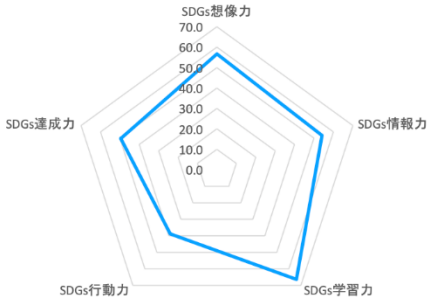
していることとなった。

準じて、「「Goal 2－ すべての人に安全で栄養のある食料を確保する」というあらゆる形での栄養不足を解消し、持続可能な農業を進めることへの関心、「Goal 11 － 住み続けられるまちづくりを」の、誰もが安全で快適に暮らし続けられるよう、気候変動や社会課題に適応したレジリエントなまちづくりを実現する目標に資する目標への関心の高さが続いた。「レジリエント」は、災害などの衝撃を吸収し、元の状態に回復できる力を指すが、本回答メンバーにおいては、地域のまちづくり協議会や子どもの教育支援活動、移住促進に関わる推進活動のリーダーを務めるメンバー、また、そのような慈善に資する公的活動ではなくとも、市民の健康を守る医療に関わる職業や、教師、企業人、観光ホスピタリティに関与してきたメンバー構成による。日常、自分ごととして仕事や生活を営む中に、自ずと SDGs のゴールに関わるエシカルアクションや他者配慮のためのコミュニティアクションに対する傾向も、市民生活の中に定常化されている傾向が得られた。

伊東市は「出会い つながり　みんなで育む自然豊かな優しいまち　いとう」をステートメントとし、「～行ってみたい 住んでみたい　住んでいたい　まちづくり～」と題した2021年から2030年に向けた伊東市総合計画を有している。市民生活において、人と人のつながりを自然豊かな環境の中で重視するまちづくりに、市内外からの人と人の交流についてもどのような知見があるかをインタビューとして確認した。後述の（3）今回の対象者（伊東市民）の特徴・傾向において記すこととする。

SDGs５つの力

	n数	SDGs想像力	SDGs情報力	SDGs学習力	SDGs行動力	SDGs達成力
2023年	11	56.7	54.2	66.3	38.9	49.5



	n数	SDGs想像力	SDGs情報力	SDGs学習力	SDGs行動力	SDGs達成力
学習したのでよくわかって行動している	5	75.9	64.8	86.5	70.8	65.3
学習したのでわかっているが、行動していない	4	42.6	52.3	51.4	0.3	35.5
学習したことはあるが、よくわからない	0					
聞いたことがあるが、よく知らない	2	36.8	31.5	45.8	36.3	38.3
関心がもてない	0					
聞いたことがない、知らない	0					

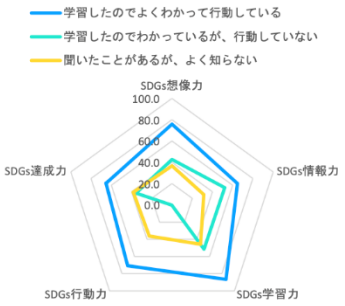
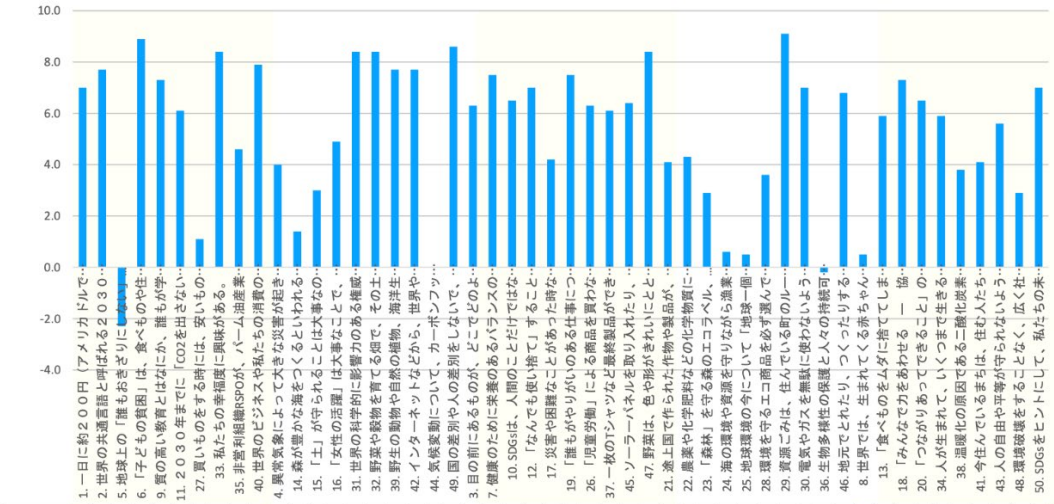


図 3.2　SDGs Survey 5 つのコンピテンシー別 回答平均値

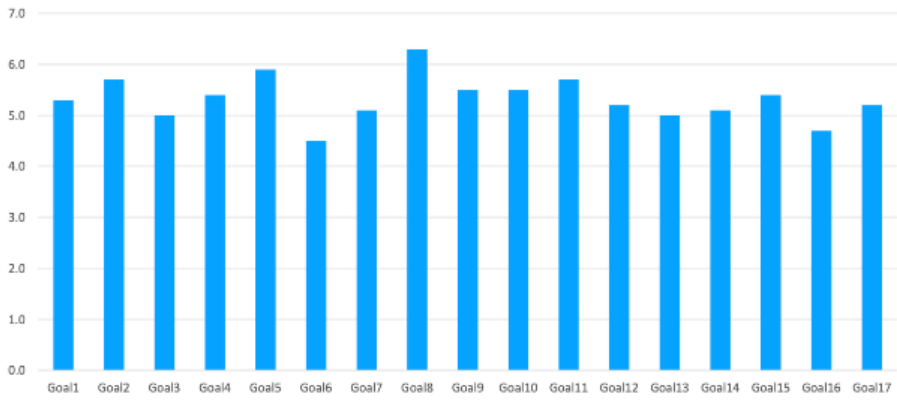


	1	2	5	6	9	11	27	33	35	40	4	14	15	16	31	32	39	42	44	49	3	7	10	12	17	19	26	37	45	47	21	22	23	24	25	28	29	30	36	46	8	13	18	20	34	38	41	43	48	50
2023年	7.0	7.7	-2.3	8.9	7.3	6.1	1.1	8.4	4.6	7.9	4.0	1.4	3.0	4.9	8.4	8.4	7.7	7.7	0.0	8.6	6.3	7.5	6.5	7.0	4.2	7.5	6.3	6.1	6.4	8.4	4.1	4.3	2.9	0.6	0.5	3.6	9.1	7.0	-0.2	6.8	0.5	5.9	7.3	6.5	5.9	3.8	4.1	5.6	2.9	7.0

1. 一日に約２００円「アメリカドルで…
2. 世界の共通言語と呼ばれる２０３０…
5. 地球上の「誰もおきざりにしない」…
6. 「子どもの貧困」は、食べものや住…
9. 質の高い教育とはなにか、誰もが学…
11. ２０３０年までに「CO2を出さない…
27. 買いものをする時には、安いもの…
33. 私たちの幸福度に興味がある。
35. 非営利組織RSPOが、パーム油産業…
40. 世界のビジネスや私たちの消費の…
4. 異常気象によって大きな災害が起き…
14. 森が豊かな海をつくるといわれる…
15. 「土」が守られることは大事なの…
16. 「女性の活躍」は大事なことで、…
31. 世界の科学的に影響力のある権威…
32. 野菜や穀物を育てる畑で、その土…
39. 野生の動物や自然の植物、海洋生…
42. インターネットなどから、世界や…
44. 気候変動について、カーボンフッ…
49. 国の差別や人の差別をしないで、…
3. 目の前にあるものが、どこでどのよ…
7. 健康のために栄養のあるバランスの…
10. SDGsは、人間のことだけではな…
12. 「なんでも使い捨て」することと…
17. 災害や困難なことがあった時な…
19. 「誰もがやりがいのある仕事につ…
26. 「児童労働」による商品を買わな…
37. 一枚のTシャツなど最終製品ができ…
45. ソーラーパネルを取り入れたり、…
47. 野菜は、色や形がきれいにとと…
21. 途上国で作られた作物や製品が、…
22. 農薬や化学肥料などの化学物質に…
23. 「森林」を守る森のエコラベル、…
24. 海の環境や資源を守りながら漁業…
25. 地球環境の今について「地球一個…
28. 環境を守るエコ商品を必ず選んで…
29. 資源ごみは、住んでいる町のルー…
30. 電気やガスを無駄に使わないよう…
36. 生物多様性の保護と人々の持続可…
46. 地元でとれたり、つくったりする…
8. 世界では、生まれてくる赤ちゃん…
13. 「食べものをムダに捨ててしま…
18. 「みんなで力をあわせる ― 協…
20. 「つながりあってできること」の…
34. 人が生まれて、いくつまで生きる…
38. 温暖化の原因である二酸化炭素…
41. 今住んでいるまちは、住む人たち…
43. 人の自由や平等が守られないよう…
48. 環境破壊をすることなく、広くな…
50. SDGsをヒントにして、私たちの未…

SDGs想像力　SDGs情報力　SDGs学習力　SDGs行動力　SDGs達成力

図 3.3　SDGs Survey50 の質問別 回答平均値



	Goal1	Goal2	Goal3	Goal4	Goal5	Goal6	Goal7	Goal8	Goal9	Goal10	Goal11	Goal12	Goal13	Goal14	Goal15	Goal16	Goal17
2023年	5.3	5.7	5.0	5.4	5.9	4.5	5.1	6.3	5.5	5.5	5.7	5.2	5.0	5.1	5.4	4.7	5.2

図 3.4　SDGs Survey　17 の目標別　回答平均値

（3）幸福度診断の状況

幸福度診断 11 人の回答結果を図 3.5～3.7 に示す。なお、幸福度診断（Well-being Circle）の Web サイトでは、レーダーチャートとして表示されるが、比較容易性のため折線グラフとした。

図 3.5 では、対象 11 人の回答平均を、一般回答（Web サイトで公表されている）データとともに示す。比較のため、図 3.6 では、診断結果で総合が 85 ポイント以上と高得点の 5 人を、図 3.7 では、今回の調査で比較的得点が低くなった総合 70 ポイント未満の 3 人を、それぞれ図 3.4 から分けて示す。

調査対象となった 11 人全員の幸福度総合ポイントが 77.2 と、幸福度診断 Web サイト上の一般回答平均値 63.0 を上回っていた。ありのまま力、ストレスの低さが、一般平均もそうであるように、今回の調査でも全体的に低い傾向を示している。図 3.6 に示すように、総合ポイントが高い 5 人は多くの項目で高いポイントであるが、ポイントが高い項目と低い項目の差が顕著に表れている。いっぽう、総合ポイントが比較的低かった 3 人については、ポイントが高い項目と低い項目のポイント差がさほど大きくなかった。

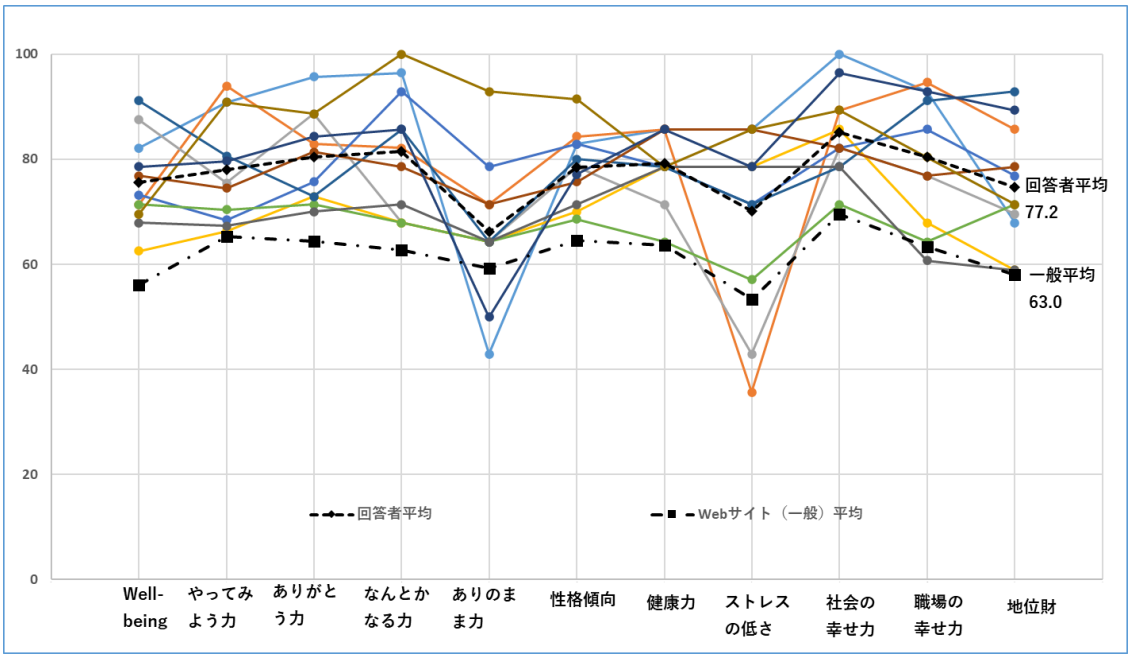


図 3.5　幸福度診断　回答者全員

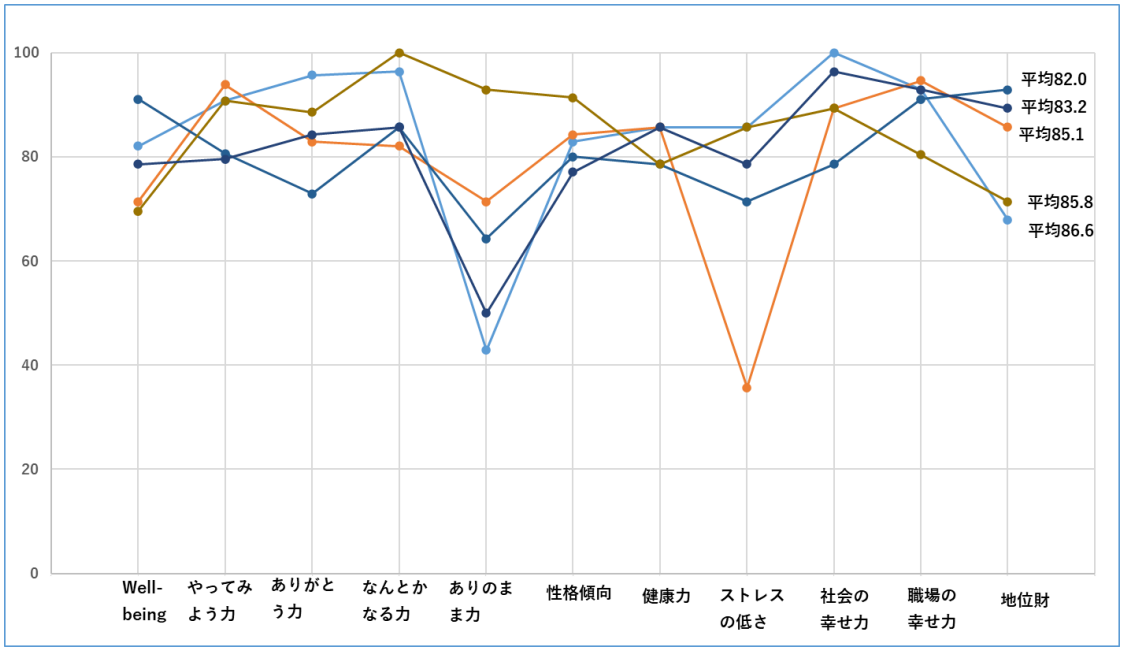


図 3.6　幸福度診断　総合点高得点回答者

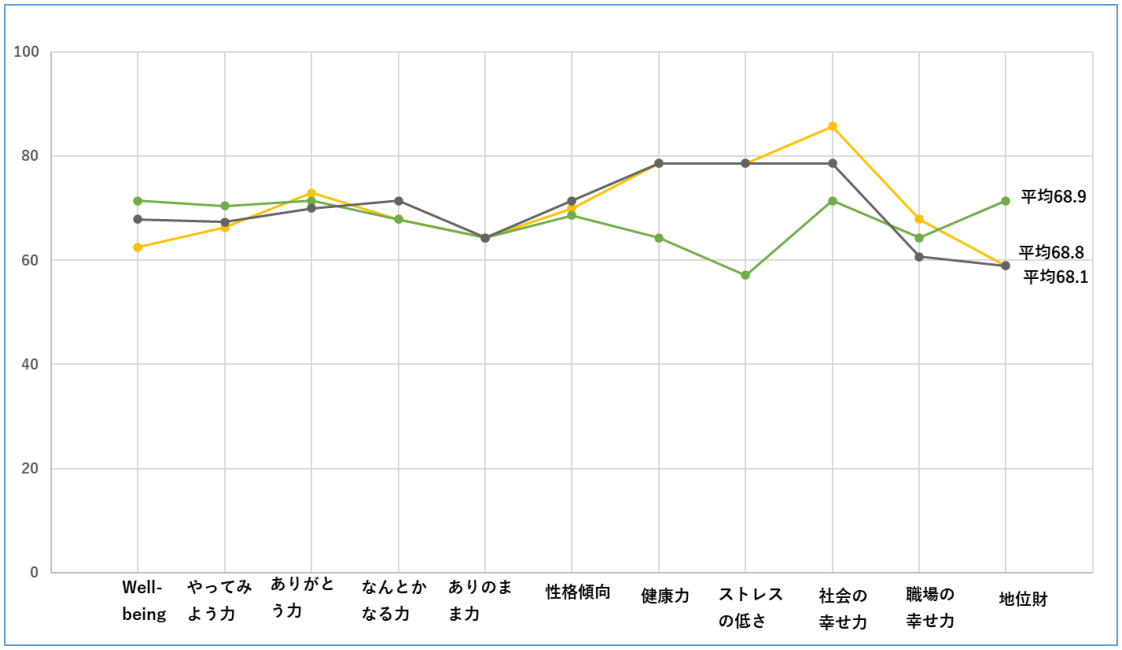


図 3.7　幸福度診断　総合点 70 点未満回答者

（4）幸福度と SDGs Survey 回答の関係性について

SDGs Survey 50 問のうち「幸福度に興味関心がある」という回答の高低と「幸福度」の高低の関係性は、

①「幸福度に興味関心がある」という回答が 10.0 であった 7 人のうちの 5 人が 83.2～86.6 ポイントの高い幸福度総合点を示していた。

②「幸福度に興味関心がある」という回答が 5.0 であった 3 人のうちの 3 人が 68.1～82.0 ポイントの幸福度総合点を示していた（全体一般収集されている幸福度総合点は 63.0 ポイント）。

③「幸福度に興味関心がある」という回答が 5.0 であった 3 人うちの 1 人は幸福度総合点 82.0 ポイントの幸福度総合点を示していた。

④「幸福度に興味関心がある」という回答が 7.5 であった 1 人の幸福度総合点は 77.8 ポイントの幸福度総合点を示していた。

４．インタビュー結果および考察

SDGs Survey および幸福度診断の結果を踏まえ、調査対象者それぞれの回答で特徴ある点を主としてインタビューを行い、SDGs 意識や行動、幸福度に関する意識に関して、インタビューから得られた結果を含めた考察は次のようなものであった。

（１）SDGs やエシカルアクションの取り組みのきっかけに関して

・SDGs やエシカルアクションに対するきっかけとしては、自己の経験の振り返りから「人と人の関わりによる影響がある」との回答：11 人

・SDGs に関係する情報の入手経路としては、エシカルアクションを実践している人や、その良い指向モデルを自らが肯定的に評価した人が「SDGs を学習したのでよくわかって行動している」という回答：５人

・信頼関係よりも批判的文脈の中で情報入手をしている場合は「学習したのでわかっているが行動していない」という SDGs に関わる否定的、または興味関心を得にくい回答：４人

これらのことから、人と人の関係性から共同体としての取り組みに至るコミュニティ形成が成立すると考えられ、「SDGs を学習したのでよくわかって行動している」との回答が 5 人と実践に向かっているが、人間関係性が作用しない場合には、SDGs に関わるエシカルアクションへの取り組みに対するアクティブさは伴いにくく、「学習したのでわかっているが行動していない」が４人、「聞いたことがあるがよく知らない」２人という回答に至っており、SDGs の取り組みに限って言えることのみではないが、「良好な人間関係を構築できうる場合」に自らの「肯定的な行動を高める可能性」があるといえる。

（２）幸福度と SDGs の相関について

幸福度に興味関心がある回答がある一定の幸福度総合点を高めていること、幸福度に興味関心を自らは示していない回答者の幸福度総合点は低くなっていること、興味関心の中間回答者においては幸福度総合点も中間点が示された傾向を得ることとなっている。いっぽう、3 人においては幸福に興味関心への回答は「わからない」という回答であり、この３人の回答共通項は社会性に関わる活

動の強度が高く、地域活動において人との連携に熱心である回答者であり、社会的活動側面の強度が強いプロファイルがある。幸福に興味関心への回答が 10.0 ポイントであっても、幸福度総合ポイントが 68.9 ポイントであった 1 人も社会的活動側面の強度が高い人物であった。高い幸福度総合点を得られていて幸福に興味関心への回答が 5.0 ポイントであっても幸福度総合ポイントが 82.0 ポイントであった 1 人も「わからない」という回答でありながら、社会的には作家としての活動評価を世界的に得ているステイタスを得ている人であった。

これらのことから、社会的収入やステイタスを得ている人たちが、自己探究においては幸福度に満たされるよりも、さらに自己満足のために評価を求めていく傾向があり、幸福度総合点が高い人たちは社会的収入やステイタスを高く得ていなくても、自己探究において何かしらの満足を得る他者関係性を語っており、自らが自らのまま自然に生きていく選択を肯定的に語り、自らの幸せが他者の幸せを作り出していることへの経験や実感についての文脈が回答の中に共通して得られた。

このことは、「幸福」の尺度については個人差があり、その人固有の価値観があるため、回答者のインタビュー発言にも「一概に幸福というのは一定の尺度はなく個人個人の感じ方によると思う」という「幸福」素養についても個別最適が認められる結果となっている。

このなかでは、回答者 11 名中、「人の幸せに貢献できることが自らの幸せにつながる」という回答が取得できており、家族に対して、パートナーに対して、両親に対して、子供に対して、また、友人に対して、地域住民に対してなど、具体的な関係性を有する対象者を得た回答となっている。

また、幸せを感じるという回答に付随する「一人ではない」や「幸せを感じる時、そこに自分以外の人が存在している」など、幸せを得る際の環境設定として、幸せを想起するきっかけにおいて、人と人との間の関係性構築が全員に影響していることがわかった。他者とのベンチマークが一つの自己指標を与えること、意識化させることへのトリガーとなっていることが顕現している。

（3）今回の対象者（伊東市民）の特徴・傾向について

今回調査対象となった伊東市民の Well-being Circle の回答は、11 人全員の幸

福度総合レイティングが、Well-being Circle Web サイト上の一般回答平均値を上回っていた。特徴として、収入や仕事環境における経済的な素養によるものではなく、経済力が低くても幸福度は高く評価されており、自然が豊かな環境、自らを安心・安全に守ることができる環境に、現在の納得感を得ていることと回答されている。

これに関しては、インタビューの結果から、自らがその納得をしていくプロセスに二種類の回答が得られた。

①自らが身を置いている現在の環境の他の環境について経験を有しており、例えば、海外経験により日本を比較することができたり、国内都市部の生活経験により伊東の良さを比較して実感することができている：5 人

②自らがずっと伊東に生まれ伊東に育ち伊東に暮らしているが、その伊東の良さについて外から来た人に言われて、初めて自らの環境を認識することがある。自らの環境を当たり前と思っていたことが、伊東の外では当たり前ではない、自然の豊さを有していることに気づくことができたという認識が語られている：5 人

このことより、幸せを感じるという回答に付随する「一人ではない」や「幸せを感じる時、そこに自分以外の人が存在している」などと同様に自らが幸せや豊さを得る際の環境設定として、幸せや豊かさを想起するきっかけにおいて、自らがいる場所とそれ以外の場所との環境比較や、世界観比較、異質なものとの関係性構築が影響することが顕現しているといえる。

他者環境とのベンチマークが一つの自己指標を与えること、意識化させることへのトリガーとなっていることが確認できる。

これらより、人の幸せや豊かさを付与するには、自らが肯定的に受容できる環境設定や人間関係設定が有用であること、そのようなコミュニティに自らを置くことの納得性、または、そのようなコミュニティ創造が鍵となり、そこから価値共有・感情共有・さらには憧憬共有のような自らが自らを認識し、他者との関係構築が望ましくあることへの「理解関係」「共有関係」「肯定関係」の創造が鍵となる結果が得られた。

５．まとめ・今後にむけて

令和２年から３年間の SDGs Survey 調査を通じて、大学生の SDGs 意識・行動変容に関する調査を継続実施し、ミレニアル世代・Z 世代の学生において、コロナ勃発時期の人と人の直接接触の関係性が失われた時期においても、環境経営の授業の事前事後調査において、SDGs の重要性が認識されていたという学習効果は得られていたが、その重要性から SDGs 達成に向けた具体的なエシカル行動は、経済的および生活上での制約を理由に、エシカルな行動に移せる範囲が狭いことが判明していた。特に、環境・人権配慮の行き届いた認証商品を求めるエシカル消費については、その価格帯が高額であるという認識から積極的な購買に向けたハードルがあることも結果づけられていた。それは「自分ごと」として社会課題を捉えることへの困難さにも通じる結果となっていた。特に、そのことは、SDGs Survey の「達成力」のコンピテンシーに設定している「世界の未来のために良いことを周りの人や社会へ伝える影響力」という他者との協働機会を自らが掴む不足・未達の結果に帰結していた。

そこで、本年度、地方自治体で SDGs を推進しようとする静岡県伊東市において、実際に社会生産性を担い地域コミュニティ活動を協働推進する 30 歳代から 70 歳代の一般市民リーダー11 名の SDGs 意識やエシカルに関わる意識・行動と幸福度の関係性について調査を行うこととしたのは、生活や人生に密着した「自分ごと」としての社会における SDGs を重要とする認識へと、その因子分析の領域を拡張するためであった。

自らの日々の営みが、意識的にも無意識的にも、実際のエシカルアクションに結びつき、幸福との相関を得られるのかどうか、社会生産活動に帰属してからの関心・行動の変容や幸福度に関して、何がトリガーとなるのか、また、それは自らの幸福につながるのか、定量調査とともに個別インタビューを通じた定性調査を実施した結果は、特に、幸福度に関わる身の回りの環境設定が、個別最適の回答を伴うこととなった。「幸福」については、個人ごとの価値観や倫理観、道徳感等が、その個別の人生経験により差異を示す。しかしながら、共通して回答確認されたのは、「良好な人間関係構築」の影響が「幸福感」を自らが認識する「自分ごと」へのトリガーとなっていることであった。これにより、エシカルアクションに向けた学習段階においても、経済的制約領域に狭められないプロジ

ェクト推進の可能性、エシカルの重要性を日常生活で自分ごととするためには、「人間関係構築」に向けたプロジェクトラーニングの可能性について、今後の課題設定を得ることができた。

SDGs に向かって、そのゴールのためにエシカルアクションを行うことが個人の幸福をもたらすことは、個別最適の結果となるが、個々に他者関係性において「理解」「共有」「肯定」の関係創造に幸福を実感することは、SDGs が達成を目標としている包摂性や協働性につながるという結果が得られた。「SDGs と言わずとも、日頃から次世代がより良くなるための想像をすれば、自ずと SDGs に繋がる行動となっている」という回答が、インタビューにおいて 11 名中全員から発言されていたことがそれを裏付けている。

SDGs は一つのツールであり、Think Globally, Act Locally.のグローバルアジェンダに向けて 17 のゴール・169 のターゲットから構成されているが、その内容は全てが因果的につながり合っていることは、すでに 2015 年 9 月の国連サミットで全会一致の採択以来、年月を経て認識されつつあることであろう。SDGs は、「持続可能な開発」に向けて地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」を誓った SDGs は発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なチャートである。

本研究は、この SDGs の普遍性が個人レベルのエシカル・トランスフォーメーションをもたらし、人の普遍的幸福の向上に連動するとの仮説を置き、調査分析を進めたが、SDGs もしくはエシカルに関与する学習や行動推進機会の行動因子は「人と人の良好なコミュニケーション」に起因することを捉えることができた。

その良好なコミュニケーションを創出するための「場」や「機会」の重要性を取得できたところから、今後は、その創造的プロジェクト・オペレーションについて研究を継続して行きたい。それは、アルファ世代、Z 世代からシニア世代プラチナ世代まで普遍的な関係創造に至るものと想定する。

そのためにも、今後、学校教育における個人の幸福に行き届く ESD（Education for Sustainable Development）研究や、市政運営が細やかに行き届くオペレーションについて普遍的課題と相関分析について研究を重ねたい。それは、人と人のコミュニケーション力に関わる普遍的な「人間研究」に向かう、SDGs が目指す

「21 世紀のマインド・イノベーション（意識改革）」によるエシカル・トランスフォーメーションに資するものとなることを目指したい。その因子については、今後、（一社）スマートシティインスティテュートの LWC 指標なども参考とし、政策立案に関わり地域や市民の状態を測る指標も参考として、普遍的幸福へのプロジェクトデザインなども研究していく必要があると考える。そのようなことが、世代を超えたすべての包摂的な市民生活の幸福に資する取り組みとなれば幸いと考える。

謝辞

本研究は 2023 年度しあわせ研究費の助成を受けたものです。

本研究を進めるにあたり、協力頂いた伊東市民の皆さまに感謝申し上げます。

注釈

[1] SDGsSurvey は、一般社団法人日本エシカル推進協議会のエシカル教育ワーキンググループが開発したプログラムである。SDGs に関する 5 つのコンピテンシーのレベル（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）を評価する一つのツールである。エシカル推進協議会が Web サイトで一般公開している。
https://www.jeijc.org/topics/jei-sdgs-online-survey/

[2] 幸福度診断は、一般に公開されている幸福度 web 調査である well-being-circle を利用した。34 項目の評価を 12 項目（Well-being、やってみよう力、ありがとう力、なんとかなる力、ありのまま力、性格傾向、健康力、ストレスの低さ、社会の幸せ力、職場の幸せ力、地位財）で得点付けされる。回答平均も一般に公開されている。
https://www.lp.well-being-circle.com/

[3] 一般に公開されている SDGs Survey では 50 問それぞれの回答内容は得られない。

参考文献

薄羽美江（2022）「JEI SDGs Survey -持続可能な開発目標の評価と EX -エシカル・トランスフォーメーション・考」『産業と教育』No.831, pp.14-19

加渡いづみ・薄羽美江(2020)「SDGs 学習の視点から考える持続可能な能力開発のステップ：キャリアデザインのためのコンピテンシーの開発」『消費者教育』40, pp.47-57。

白鳥和彦（2021）「SDGs 意識・行動変容調査―（その１）学習効果によるコンピテンシーの変化―」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第 4 号, pp.58-74

白鳥和彦（2022）「SDGs 意識・行動変容調査―学習効果によるコンピテンシーの変化―（その２）」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第 5 号, pp.123-137

白鳥和彦、薄羽美江（2023）「SDGs 意識・行動変容調査―学習効果によるコンピテンシーの変化―（その 3）」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第 6 号, pp.55-72

日本エシカル推進協議会(2017)「JEI SDGs online Survey」。

（https://www.jeijc.org/topics/jei-SDGs-online-survey/　最終アクセス 2024 年 3 月 20 日）

前野隆司、太田雄介（2023）『実践！ ウェルビーイング診断』2023 年 5 月、ビジネス社